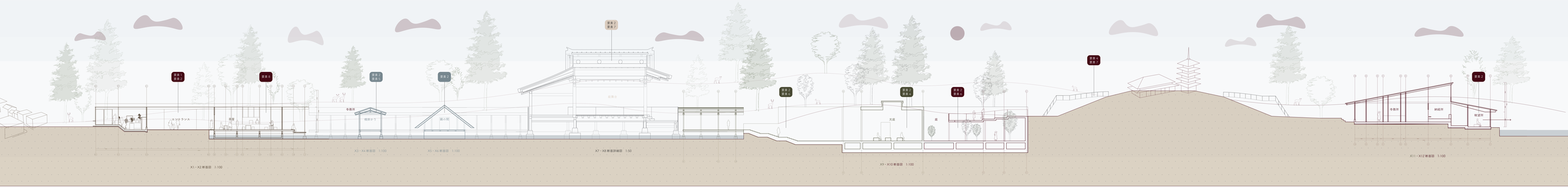
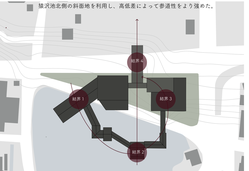


三条通り

全体配置構成

全体配置は、3つの要素によって構成している。
禁沢池北側の斜面地を利用し、高低差によって参道性をより強めた。



プロセス1

五感に働きかける空間

A エントランス

参道空間のはじまりとなるメインエントランス
明確な門はもうけず、屋根のアをくぐることで
ゆるやかな門性の機能をもたせた。
視界がひらけたまちから、視線が一度下がる。

奥西ちゃん
景観の思わらは第四海的広がる

B 茶屋

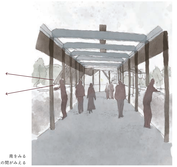
エントランス周側には茶屋を設け
門前の公共性を取り込んだ。

プロセス2

景素間へ働きかける空間

C 橋掛かり

橋掛かりでは
視線が広がると同時に
エントランスからの遠場が狭まる。



周ちゃん
先には鏡の間がみえる

O 鏡の間

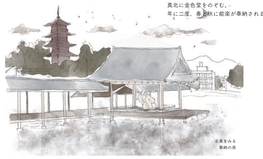
橋掛かりで広がった視界は
一転して閉ざされる。
鏡板に水面が反射することで
視線も落ちる。
能が奉納される際には演者の控室となる。

プロセス3

自己を意識させる空間

E 能舞台

興福寺の参道軸上に位置する能舞台は
真北に全色変るのぞむ。
年に二度、春と秋に能楽が奉納される。

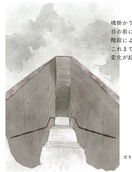


北原ちゃん
奉納の様

プロセス4

無意識へと向かう空間

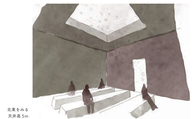
F 地下へ続く階段



橋掛かりから地下へと続く階段
日介前には木々が広がる。
階段によって
これまでの歩行リズムに
変化が起こる。

北ちゃん

F 元庭



北原ちゃん
天井高さ

元がそそがれる地下空間
視型空間として立かれる。

プロセス5

誰から型へと変容する空間

G 庭

視型空間を抜けた先には半地下の庭が広がる。
木々の間をゆるやかな階段ですすみ
再び地上へと戻る。

南西ちゃん
地上へのゆるやかな階段がみえる

興福寺

橋

北ちゃん
正面には金色堂がみえる

橋をわたると興福寺全体を見渡すことができる。

プロセス6

誰から型へと変容した空間

H 寺務所

興福寺の得跡に配置した寺務所
納望所ではこれまでの参道を一望できる。

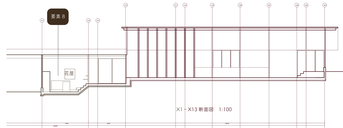
奥東ちゃん
奥には釈迦堂がみえる

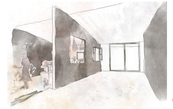
プロセス7

誰から型へと変容する空間

I 花屋

勧進の最後に花屋を設け
日常性のある風景へと戻るきっかけとした。





北ちゃん

人々は
日常、まちへと戻っていく。

三条通り